



「フヒヒ...これで私達は...大親友だな...」

星のカンヅメ



第一章

はじめて
ひとつになつた日

「ふー、いいライブだったなあ」

今日は俺の担当アイドル、星輝子の初の全国ツアー初日だ。初めての地方でのライブは無事に終わり、お客さんの反応も上々。デビュー当時から輝子と二人三脚で活動を続け、多くの困難を乗り越えようやく実現した全国ツアー。夢が一つ叶った瞬間と言うのは何とも言えない高揚感があるものだ。



撤収作業が全て終わり宿泊先のホテルに着いたところ、その高揚感は薄れることが無かった。

「フヒ…プロデューサー…嬉しそうだな…」

同じく高揚感が抜けないのだろう、未だに顔を上気させた輝子が言う。

輝子は「このところすっかり俺に懐いている。俺の姿を見ると顔をパツと輝かせ、常に俺の後ろをとてとてとくっついて歩く。」

俺もそんな輝子が可愛くて可愛くて仕方がない。



「…だが、ホテルで俺の部屋の前までくっついて来るのはどういう訳なんだ？」

「…輝子、今日は疲れただろう。ほら、自分の部屋に戻って早く休みなさい」

「…いっしょが…、いい…」

「…えっ？」

耳を疑うような発言に思わず変な声が出た。

じっ…



「…駄目か…？」

「いや、駄目とか以前に…」

俺は輝子のプロデューサーで、輝子は俺の大事な担当アイドルで。同じ部屋に泊まって一晩過ごすなんて問題大アリだ。俺は健全な成人男性であり、こんな可愛い女の子と一緒に泊まって何もしないでいられる程人間は出来ていない。

「親友……」

さっきまでキラキラした顔を
していた輝子の顔がみるみるうちに
しぼんでいく。

困った。
と言うか、この子は男と泊まるという事が
どういう事が解っていないんだ。
輝子はポッチ非リアを自称するだけ
あってそういう知識に疎いきらいがある。



「あ、あのね……輝子さん。
年頃の女の子が男と二人きりで一晩過ぐすのは
危ないことなんだよ?」

何と説明したらいいのかわからないが、
なるべく遠回しに、あくまでも優しく、
論じにかかるといい。

「……知ってる……」

「…えっ?」

「……それくらい…幾ら私でも知ってる…」

「どういふことだ…?解ってて言ってる…?いやまさか…何か勘違いをしている筈…。俺が混乱していると、輝子は決定的な一言を放った。」



「し、親友となら…私は…いいぞ…」

「…えっ…ええっ…」

「……わ、私は…親友が、いいんだ。」

「…」まで言っても…解らないのか……?」

顔を真っ赤にして目に涙を溜めてプルプルしている輝子からは強い決意が見てとれた。

ありったけの勇気を振り絞って言ったのだらう。俺の返答を、少し怯えるようにして待っている。

こんなにも勇気を振り絞って俺に好意を寄せてくる相手を無下にするなんていうこと出来る筈もない。

「…後悔、するなよ？」

「だ、大親友…っ！」



顔をパッと輝かせ、子供のようには俺に飛びついてくる。

「…フヒ、親友…大好き」

「これが、全ての始まりだった…」

ベッドに横たわった輝子は不安と期待が入り混じった表情でこちらを見上げてきた。

本当に、いいのか…？

俺が確認すると、輝子はおどおどと話し出した。



フヒ…私は…ずっと一人でジメジメと日陰で生きてきた…
これからも、ずっとそうして生きていくものだと思ってたんだ…
…でも、プロデューサーはそんな私を見つけてくれた…
初めてだったんだ…キノコじゃないトモダチが出来たのは…
…ずっと、私と頑張ってきてくれて…
今日こうしてようやく二人ぼっちで育ててきた夢が叶って…
…凄く…凄く…嬉しかったんだ…

…これからも…ずっと…
親友と一緒に居たいんだ…
だから…

親友が、いちばん…
私の…だから…

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

いっ

うっ

……ああもう、可愛すぎるだろっ……ッ！
俺は優しく輝子の身体を組み敷くと、
愛撫を始めた。
愛おしさを確かめるように、
細い身体にくまなく口づけて、
大切な宝物を扱うが如く触れていく。

ひあッー！

し、親友うっ……！

ひくんっ

輝子の身体はすぐにそれと解る程
緊張していた。ゆっくと。
焦らず、ゆっくと。
優しく解していく。

くちゅっ

くちゅっ

くちゅっ



次第に緊張が解けて
輝子はこちらに全てを委ねてくる。

あうん、
あうん、

はあ、
はあ、

はあ、
はあ、

はあ、
はあ、

びく、
びく、

びく、
びく、

ひゅ、
ひゅ、

くちゅ、
くちゅ、

くちゅ、
くちゅ、

きゅん、
きゅん、

くちゅ、
くちゅ、

ひゅ、
ひゅ、

きゅん、
きゅん、

くちゅ、
くちゅ、

くちゅ、
くちゅ、

だんだんと輝子の顔も身体も
蕩けていく。3本と増やし
指を2本、3本と増やし
中をクチュクチュと掻き混ぜると
身体がビクビクと跳ね、喘ぎ声が漏れる。

「こっちももう、我慢の限界だ。」

輝子……んんんん、
いいかな……?

あ……んんんん、
あ……んんんん、

びくっ

はあ♡

はあ♡

はあ♡

ぞくっ♡

ぞくっ♡

ぞくっ♡

キュン

キュン

そそり立った性器を差し出すと、
輝子は初めて見る男性器の大きさと
グロテスクさに目を丸くしていた。



フヒ…怖い…
けど…

…怖い？

親友だからな…
だいじょうぶだ…

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

きゅん♡

きゅん♡

きゅん♡

はぁ♡

ずちゅっとな音を立てて
輝子の中へと侵入する。

輝子の中は狭くてとろとろとしていた。
奥へと進む毎にぬめった腔壁がきゅんと
締め付けて来る。

ひあ
ああ
ああ

きゅうう
きゅうう

すちゅ

ぢゅうう

びくん

ころやい

根本までみっちり
と狭くて柔らかかな
腔肉に締め上げら
れる快感は想像を
絶するものがあった。

ずちゅ、ずちゅ、と腰をストロークさせる度
輝子が甘い声をあげる。

蕩けそうな程熱いぬめった膈壁は
ペニスを絡めとり、動く度に壁が
カチを刺激する。

それはとても甘い快感だった。



輝子は快感に震えながら必死に俺にしがみついている。足を俺の腰にがっちり絡め、これでもかと強くしがみつく。

しんぞう…っ♡

がく♡
びくん♡

ぎゅう♡
ぎゅう♡
ぎゅう♡

しんぞう♡

がく♡

ぎゅう♡
ぎゅう♡
ぎゅう♡

ぎゅ♡

ぎゅう♡
ぎゅう♡
ぎゅう♡

がくがくと身体を震わせ、熱に潤んだ目で俺を見上げる。

びく♡
びく♡
びく♡

しんぞう♡
しんぞう♡
しんぞう♡

ぢゅ♡
ぢゅ♡
ぢゅ♡

ぢゅ♡
ぢゅ♡
ぢゅ♡

がく♡
がく♡
がく♡



必至に俺にしがみつき
快樂に悶える輝子が可愛くて、
愛おしくて、余計に燃え上がる。

部屋に響く声は混ざり合い、
この熱が自分のものなのか
輝子のものであるのかさえわからなく
なってくる。

打ち付ける高鳴りはほとんど
高まり、脳内は快樂と輝子への
愛おしさしか感じなくなってくる。

キィキィ...
キィキィ...
キィキィ...

キィキィキィ

キィキィキィ

キィキィキィ

キィキィキィ

キィキィキィ



もう何も考えられないのだから、
悲鳴のような声をあげながら
俺を呼ぶ。

膣肉が収縮し、ぎゅゅぎゅと四方から
強く俺のペニスを締め上げる。
発熱しているかの如く熱く蕩ける感覚に
俺も限界が近い。

俺はそう呻くと、一際強く
最奥へと腰を打ち付けた。







て...し...
♡

し...し...
♡

♡
♡

♡
♡
♡
♡

♡
♡

♡
♡

♡
♡

は
♡

は
♡

は
♡

は
♡

は
♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

♡

行為が終わると、輝子は幸福に満ち足りた表情で俺の隣に潜り込んできた。

「フヒヒ…親友…幸せ…」

蕩けるように柔らかな笑顔で俺の胸に顔を擦り付ける。

「…これで私たち…本当の本当に大親友だな…フヒ…」

ライブの疲労も何もかも夢に溶けてしまったよう。今はただただ、輝子が愛おしいということしか考えられない。脳みそが全て幸福で蕩けてしまったかのよう。満ち足りたまま、とろとろと心地良い睡魔が襲ってくる。

「…おやすみ、輝子」

「…おやすみ…親友…」

軽く触れるような口づけをして、柔らかな輝子の髪を撫でながら…

そのまま、夢の奥深くまで落ちていった。

「…フヒヒ…しんゆー…大好き…」



第二章

ご褒美

「……ふー、疲れたあ……」

「このところ連日仕事が多忙を極めている。
残業続きでゆっくりする暇もない。
今日も朝から仕事であちこちを飛び回り、
ようやく事務所へと帰ってきたところだ。」



「フヒ…プロデューサー、お帰りなさい…」

俺が帰ってきたのを見ると、
輝子が嬉しそうに机の下から
這い出てぱたぱたと駆け寄ってきた。

「おー、輝子。イイ」にしてたか？」

頭を撫でると輝子はくすぐったそうに身をよじった。

ㄝ

「親友…最近忙しそうだな…」

「ああ、ちよつと仕事を立て込んで…。でも、これも輝子のためだからなあ…頑張らないと」

心配かけまいとニカッと笑ってみせる。すると、輝子はもじもじしながら「うづ言ってきた。」



「…親友…その…いつもお仕事頑張ってくれて…ありがとう。私が…こうしてアイドル出来るのも…親友のおかげだ…フヒ…。それで…その…いつもお疲れ様…って…こと…。私が…親友を癒してあげられたらな…って思うんだ…」

輝子が俺を癒し…？肩でも揉んでくれるのだろうか…？訝しげにしていると、さらにもじもじしながら輝子が言う。

「…フヒ…ちよつと、そ…座ってくれないか？」

俺が椅子に腰かけると、
輝子はぺたんと俺の前に座り込み
上目遣いで見上げてきた。

「フヒヒ……それじゃあ、親友……
始めるぞ……」



輝子は慣れない手つきで俺のズボンのファスナーを下げ、ペニスを取り出した。ぎこちない動きで扱っていく。

お、す……

「し、輝子？」

驚いて声をあげる。

「お、男の人は……」
「ハニンのStory……
嬉しい……んだろ……？」
わ、私……いつも頑張ってるプロデューサーに
喜んで貰いたくて……」

そ……

ちゅこっ、ちゅこっ、と
小さな手でできこちなく扱かれ
俺のペニスはみるみるうちに勃起した。

「あ…プロデューサー…
おっきくなってくれた…」

自分の手で勃起させた事が
嬉しかったのか、輝子は柔らかく微笑んだ。

しまっ…

「…フヒ…じゃあ…親友のために…
頑張るぞ…」

おずおずと小さな口で先端に触れる。

そして、一気に俺のモノを口に含む。

「うあああああっ—！」

いきなり蕩けるような快楽を与えられ、俺は思わず声をあげた。輝子の口の中は蕩けそつなほど暖かい。

「ん…んむ…れる…」

慣れない舌づかいが逆に心地良い。粘っこい唾液がペニスに絡みつき、舌がちろちろとペニスを責め立てる。

うあああ…
輝子…

何よりも、恥ずかしそうに一生懸命奉仕する輝子の姿がたまらない。精一杯俺に尽くす姿がいじらしく、そんな姿を見ているだけでも達してしまっているだけだ。



ペニス全体を舐めあげ、
カリをぐぼぐぼと刺激し、
尿道口をちろちろと責める。
ちゅっと吸い上げたかと思うと再び全体を口に含む。

プロデューサー…
喜んでくれてる…

ぎこちない口遣いがもどかしくも心地良い。
あまりの快感に俺はただ抑えきれない声を
あげ続けることしか出来なかった。

あ…あ…あ…

ちゅっ♡

ちゅ♡

ぐっほん♡

ぐっほん♡

ちゅ♡

ぐっほん♡

ちゅ♡

あ♡

あ…♡

あ…♡

あ…♡



ちやくちやく

あ、射待精...

じゃんぷ

あ、人...

あ、

ちやほ、

あ、

ちやほ、

あ、輝子...

あ、

あ、

じゃんぷ

ちやく

あ、

じゃんぷ

ちやくちやく

ちやく

ちやく

んむ... プロデューサーのキノコ... おいひい... ンむ...



ととと

ととと
ととと

ととと

ととと

ととと

ととと

あああああ

ととと

ととと

ととと

ととと

ととと

ととと

ととと

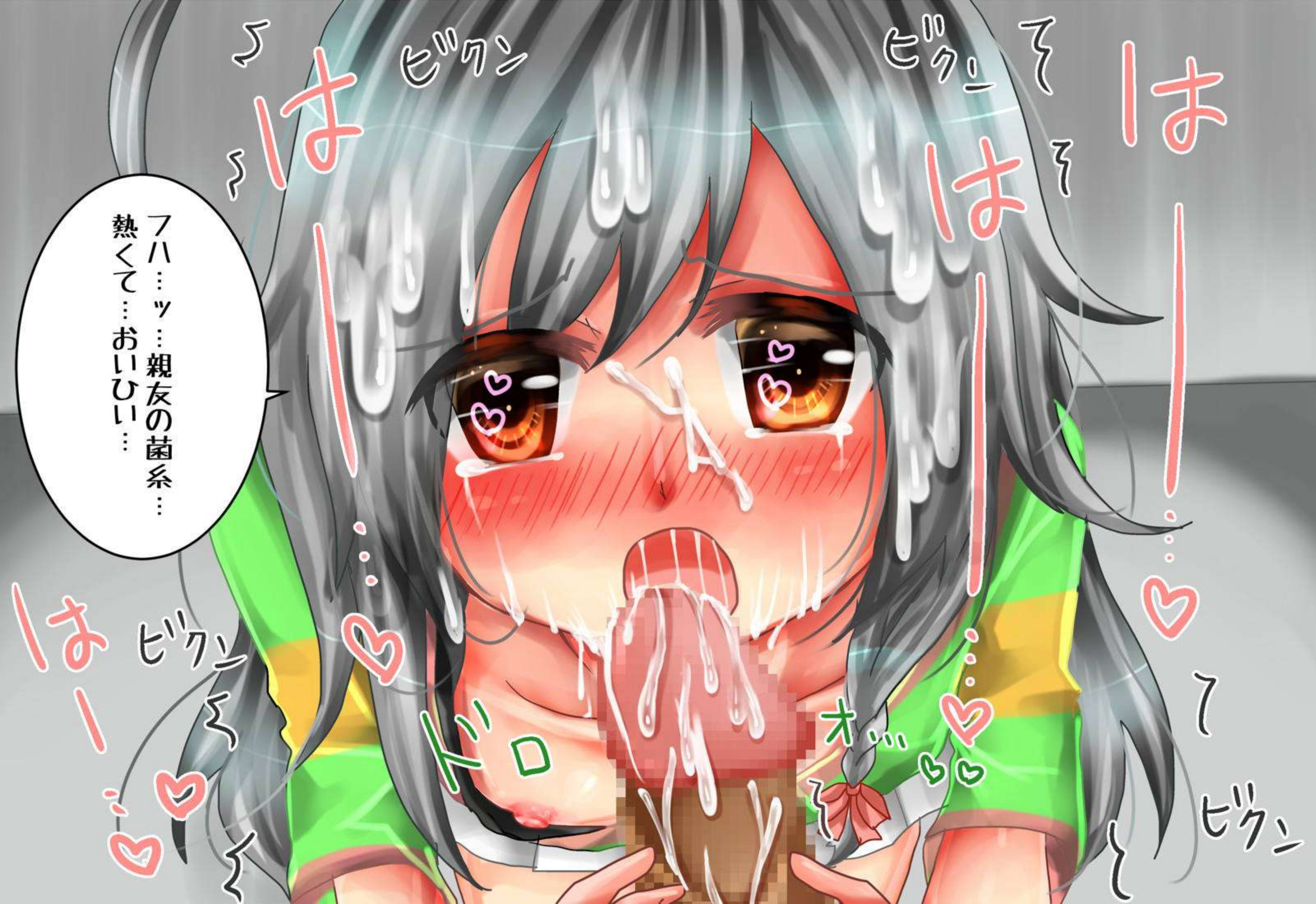
ととと

ととと

ととと

ととと

フハ…ツ…親友の菌系…
熱くて…おいひい…



「……フヒヒ……っ、私でも……親友を
気持ち良く出来た……」

よっぼど嬉しかったのか、
輝子は満面の笑顔で
俺の足にぎゅーっ
抱きついてきた。

ああ、もう、愛い奴め……。
俺はもう、輝子が可愛くて
愛おしくて仕方がなくなっ
て。輝子の髪をくしゃっ
と撫でた。

「フヒヒ……褒められた……」
猫のように顔をすりすり
と俺に擦り付けて甘えてくる。

「……親友は、凄いな……。
今日は私が親友へご褒美をあげたのに、
逆に私がご褒美を貰ってしまった気がする……。
……親友に撫でられると……。
心がどうしようもなく……。
そばゆくてむずむずするんだ……」

すいっ♡

すりっ♡

ぎゅっ♡

わしやわしやと髪を撫でる。

「やっ、やめる……くすぐりたい……くすぐりたいぞ……」

やめると言いつつも嬉しそうにぐりぐりと頭を擦り付け、輝子を見て、
（そういえば最近忙しくて構ってやれなかつたな……）と少し反省した。

わしや
わしや
わしや

≠

≠

わしや
わしや
わしや

♡

≠

そうだ、この後は事務所で少し輝子とゆったりとしたひと時を過ごす。

張っていた肩の力がストンと抜けるのを感じる。必死に身を削って頑張るだけが仕事では無い。緊張し続けていた心がほどけていく。時にはこうだった時間も大切なのだ。

輝子の零れそうな笑顔を見て、俺もくすりと笑った。

第三章

お泊り



今日は輝子が初めて俺の家に泊まりに来た。
狭いワンルームで恥ずかしいなと思っていたが、
当の輝子本人は目を輝かせてキョロキョロしている。

「ム、ム」が親友の家……」

初めて見る男の一人暮らしの部屋に
興奮を隠しきれない様子だ。

おお



「何も無いけどゆっくりして行ってよ」

しばらく俺と輝子は、テレビを見たり
イチヤイチャしたりしてまったりと過す。
なんだか俺の部屋に輝子が居ると
輝子が嫁に来たようで心が躍る。
普段から見ている何気ない風景も、
輝子がちょこんと座っているだけで
急に鮮やかに彩られたような感じがする。

夕ご飯は輝子が得意なキノ料理をふるまってくれた。
他人の手作りのご飯を食べるのは何年ぶりだろうか。
暖かさが身に染みる。

「フヒ…キノ料理だけは得意なんだ…
喜んでもらえて、よかった…」



夕食後ベッドに座ってイチヤイチャしていると、
当然のようにそうつた雰囲気になった。
すっかりこの関係が板についてきたな、と思い、
その幸せを噛み締める。

優しく輝子の服を脱がせ抱き寄せると、
輝子はそのまま俺に飛びついて上に乗っかってきた。

「輝子も積極的になったなあ……」

俺が感慨深げに言うと輝子は微笑んだ。

「……フヒ……もう……怖くないよ……。親友だからなあ……」
安心してきつた表情で俺に身体を預けてくる。

輝子の中は最初の頃のような狭さは無く、
その代わりに俺のペニスを優しく包み込むかのような
優しい快樂を与えて来る。
例えるなら、母親のお腹の中にいるかのような
暖かい心地良さ。
全てを受け入れてくれる場所がそこにあった。

とろとろの暖かい腔壁は俺のペニスにピッタリで、
優しく扱くような締め付けを与えて来る。
愛液はぐちゅぐちゅと溢れ出し、
ペニスを締めとり卑猥な音を立てる。
あまりの気持ち良さに輝子が
少し腰を動かしただけでもイッてしまいそうだ。

「ちゅっ」

「ちゅっ」

「ちゅっ」

「ちゅっ」

「ちゅっ」

じゅぷじゅぷと腰を落とす。輝子に負けじとこちらも腰を突き上げる。

フ、フヒ…っ、親友のおちん●ん…熱い…

きもちい…っ

輝子も自ら快感を得ようと腰を動かす。互いの身体を貪るようになり、くちゅくちゅと求めあう。



は〜っ♡ は〜っ♡ は〜っ♡

んんん

くちゅ

んん♡

くちゅん♡

くちゅん♡

くちゅ

くちゅ

んん♡



くちゅ



自らの好いところを見つけると
輝子は快樂に衝き動かされるかのようになり
喘ぎながら腰を動かしてきた。
俺もぐりぐりと子宮口をペニスの先端で刺激する。
突き上げる度、輝子の口からは甘い叫声が漏れた。



お互いに限界が近い。
輝子の細い腰を抱き、
大きく腰を打ち付けた。

一際大きな叫び声をあげ、輝子の腰が震える。
熱い膣肉がぎゅうううと四方からペニスを締め付けた。

あゝゝゝ
あゝゝゝ
あゝゝゝ

ためえゝゝ

イクッ

しんゆー
すー

しゅー
すー

すゝちゅ

すゝちゅ

すゝちゅ

すゝちゅ

ぞくぞく

ぞくぞく

ぞくぞく

ぞくぞく

ぞくぞく

ぐちゅ

ぎゅー

ぞくぞく

ぞくぞく

ぞくぞく

おーん

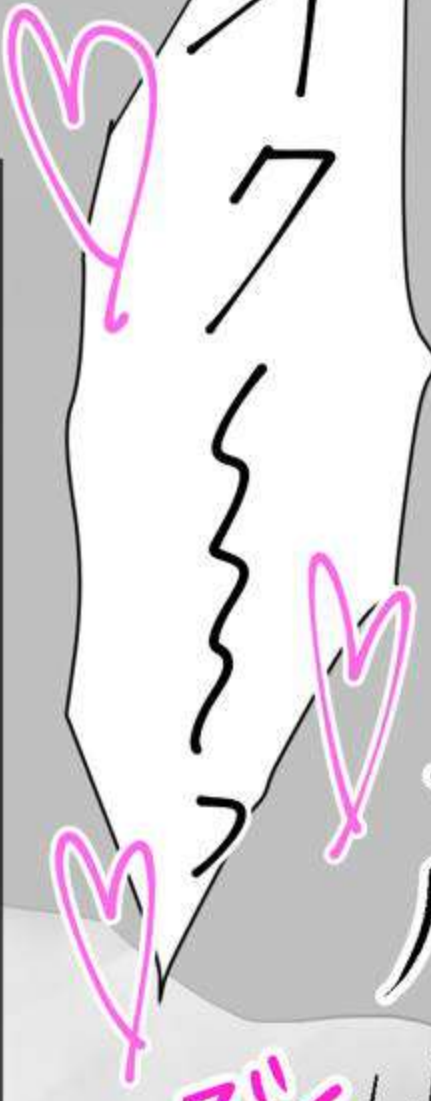
ぐちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

おーん

おーん





ゼグッ

ゼグッ

ゼグッ

ゼグッ

ドムッ

ぷん

ぷん

お尻をこすって



ドクッ

ドクッ

ドクッ

フ…フヒヒ…私のお腹の中…
親友の菌系でいっぱいだな…
フヒ…フヒヒヒ…

ぞくぞく

てく

は

は

てく

ぞくぞく

トコ、ン、ン…♡

ぞくぞく

てく

てく

てく

ちゅ、♡

ちゅ、♡

トコ…♡


てく

てく

てく

てく






行為が終わると俺達は抱き合って眠った。
二人で溶けて混ざり合ってしまったかのような
安心感と心地良さ。
輝子と抱き合って眠ると、純真無垢な子供に
戻った感覚に陥る。
不安なんて何もなかったあの頃。
安らかに、すやすやと。
ただ輝子の胸に顔を埋めて。
子供のように深い眠りに落ちる。
隣で眠る輝子の存在が愛しくて愛しくて。
まるで、甘い夢に蕩けてしまったかのように。

翌朝

—
●
●
●



目が覚めると、輝子は先に起きていた。

「フヒ…親友の服…親友の匂いがする…」

昨夜脱ぎ散らかした俺のシャツを羽織って遊んでいたようだ。
だぼだぼのシャツを羽織った輝子の姿はとても愛らしい。
ちよっとだけムラツときてしまったのは秘密だ。



「さて、今日もこれから仕事だ。
着替えて一緒に事務所へ行こう。
朝ごはんはカフェで食べようか」

「……うん。しんゆー……。
……これからも、よろしく……」

ちゅっ、と触れるだけのキスをして。
俺達は出かける準備を始めた。

星のキャンツメ

ありがとうございます
ございました！！

終

















































